

မြန်မာ
သံတော်

筏
乗
り

ビルマの
河に生きる
男たち

サル
ウィン
河

ルドウ
フー
ラ
著
河東田
静雄
訳

新宿書房

《双書》
アジアの
村から町から
……4……

မြန်မာ
သံတော်



サルウィン河の筏乗り……ビルマの河に生きる男たち^{いかだ}

一九八六年六月三〇日 第一刷発行

著者——ルドゥーフラ

訳者——河東田静雄

発行者——村山恒夫

発行所——新宿書房

東京都千代田区九段南四―六一―三―七〇二 千一〇二

電話〓〇三〇二六三一―二六一〇

振替〓東京七一―一二四九七

造本——中垣信夫＋早瀬芳文

編集——松岡 毅

印刷所——ミツワ印刷＋栗田印刷

製本所——松岳社青木製本所

定価——二〇〇〇円

0097-067018-3335

အိန္ဒိယ
သမိုင်းတိုင်း

筏
乗
り

ビルマの
河に生きる
男たち

の

サル
ウ
イ
ン
河

ルドウーフラ
河東田静雄
著

訳

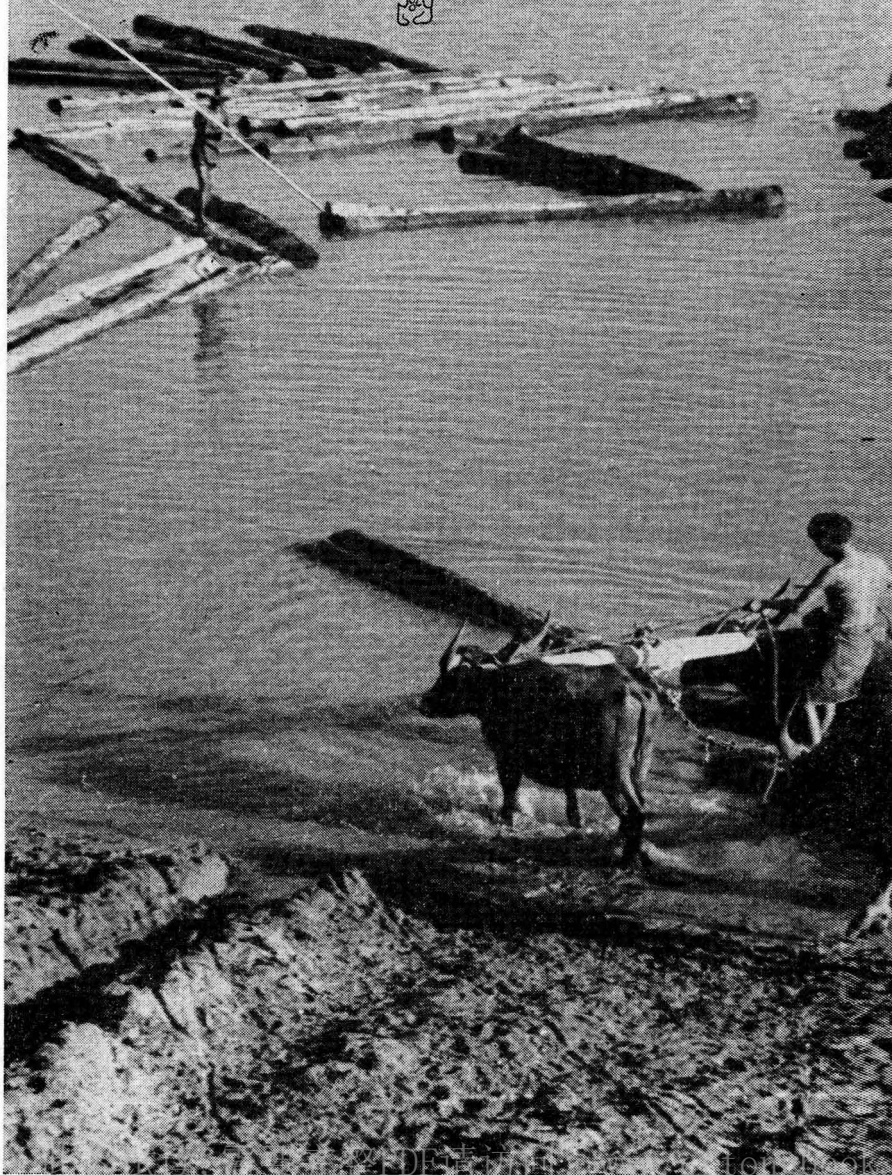
新宿書房

《双書》
アジアの
村から町へ
……4……

ア
シ
ア



အိန္ဒိယ
သံလွင်ပေါ်ပေါ်
မြို့



※

目次

※

メーセイ……………8

網場つなば(チョーダン)……………14鳥からすに尻をつつかれる……………24

最後の日……………31

下ろし人……………39

お笑い草はご免だよ……………47

舟旅の終り……………54

自業自得……………63

自分の金を自分で盗む……………69

ウー・ビャーヂー……………75

告訴された虎……………80

生命いのちの懸け甲斐もあろうというもの……………85

愚図な奴……………91

早駆け下ろし人……………98

支払い祭……………108

復員兵ウー・プワ……………117

一番損なのは丸太拾い人……………123

サルウィン……………130

カドー丸太引揚げ場……………138

二つの民族闘争……………149

イラワジ汽船ボイコット……………150

タキン・バクエーの報告……………151

丸太拾い人ストライキ……………156

モールメイン・チーク森林……………163

ビルマのチーク……………172

自分が坐っている枝を自分で切ってしまうような……………181

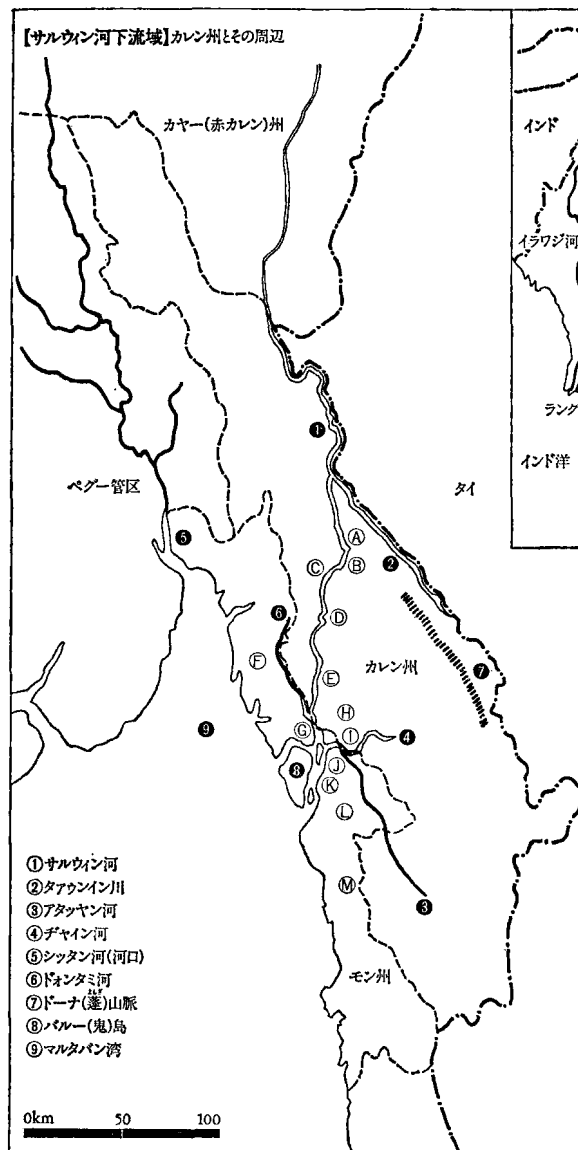
※

訳注……………189

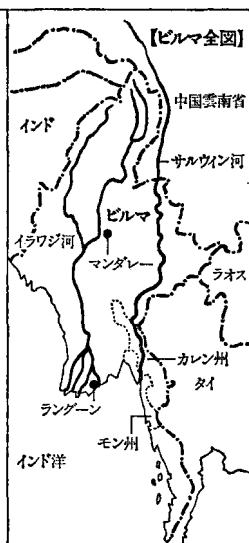
ルドゥウーフラ その人と作品……………198

※

【サルウィン河下流域】カレン州とその周辺



【ビルマ全国】



- ① サルウィン河
- ② タアウンイン川
- ③ アタッヤン河
- ④ チャイン河
- ⑤ シツタン河(河口)
- ⑥ ドンタミ河
- ⑦ ドーナ(蓬)山脈
- ⑧ ノバルー(鬼)島
- ⑨ マルタバン湾
- A メーセイ
- B インンバイン
- C カママアウン
- D シュエゴオン
- E ノバーアン
- F タトオン
- G モッタマ
- H カドー
- I ザータバイン
- J モールメイン
- K ムボン
- L チャイカミ
- M タンビュザヤツ

サルウィン河の筏^{いかだ}乗り………ビルマの河に生きる男たち

メーセイ(1)

わしも、七十歳になつてしまった。十七の年、はじめてわしはこの世界に入つた。

あの当時、サルウィン河沿いの村々の男たちは、話題といへばいつも、綱場(2)のことばかりだった。ひと雨季の間、綱場へ出稼ぎに行けば、銀貨一〇〇〇個入った袋を抱えて村に帰つて来れるんだと、よく言つていたものだ。綱場は男の世界、生命知らずで勇猛な、度胸のある男だけが集まる世界だと、綱場から帰つた男たちが、生命懸けの体験を喋っているのを聞いていると、わしらは綱場に行つてみたくなつて、居ても立つてもいられなくなつたものだった。あの頃は若くてな、血気にはやつていたからなあ。

サルウィン河沿いの村々——ウッヂー、タカアウンポー、ミイーボン、レッパン、シュエゴオン(3)、ミヤイン、ミイザイン、カママアウン(4)、コカイエツ、カモレー、カンニイナアウン、バーカッ、ナツモー、サンマーナゴ1、モービイー、ペカターの男たちは、大人になると誰でも、綱場に廻りたがっていた。

家の中から幾艘もの舟が櫂を揃え、調子を合わせながら、サルウィン河を廻つて行くのが毎日のように見えたものだ。そんな舟を眺めているうち、わしは無性に河を廻つてみたくなつた。あの男たちと一緒にサルウィン河を廻つて行つてみたくなつた。

ある日、近所に住んでいる親戚筋のウー(5)・アウンティンとウー・ポーシュエが、今日、明日にも綱場に廻るらしいという噂を耳にしたわしは、ウー・アウンティンの家に行き、一緒に連れて行つてくれと、拝むように頼んだ。ウー・アウンティンが快く引き受けてくれた時は、嬉しいうたありやあしなかった。

さっそく、おやじとおふくろに話したんだ。二人とも許してくれない。死んじまうぞ、つて言つてな。綱場に廻りたくてうずうずしていたわしは、ウー・アウンティンたちの舟が出る朝、親に知られないよう、こっそり家を脱け出し、乗り込んだ。

ウー・アウンティンが艫で舵取り、ウー・ポーシュエが舳先で、わしはそのすぐ後で漕ぐことになった。朝、まだはの暗いうちにシュエゴオンを出発した。朝飯は炊いて持つて来た。舟には、米、油、薬、塩、魚醬油(6)、乾し魚(7)など、一か月分の食糧が積んであった。舟が出発しつてすぐ、ウー・アウンティンがわしの方に、「おい、ニ

ヨーマウン、米缶見て心細くなるなよ。あっちにゃあ、店なんざ、わんざとある。俺らのとこじゃあ、娘をくれてやれば婿をもらえらるってよく言っとるが、俺らは婿だけでもらうようなもんだ。あっちじゃあ、丸太を渡してやりゃあ、なんだって手に入るわい」と声をかけてきた。舟に積んできた四ガロン(8)入りの石油缶に入った米を見て、おまえさん、心細く思うな、とウー・アウン・ティンは言いたかったのだろう。

そして、「お前にとっちゃあ見知らぬ土地かも知らんが、俺らがついとる。何も心配なこたあねえ。お前を放ったらかしたりなんかせん。他の奴ら、新顔と言やあ、面倒臭がるけどな。俺らには、別に何てこたあねえ」

わしらが綱場に遇ったのは、簾綱が外されたばかりの六月だった。上ビルマ地方で雨が多かったので、サルウィンが増水していた。水嵩が増し、兩岸までの河幅はぐんと広くなっていた。

こんな時季、水の流れが激しいうえ、渦や岩のあいだを蛇のようにグネグネくねりながら流れている水流を、何度も横切り、乗り越え、迂回して舟を漕ぐ時は、櫂を握った腕の肘を前へ投げつけ、水を掴み取るようにして力いっぱい引っ張る。二人で漕ぐ時は、二人の櫂が同じ速度で揃うよう、三人で漕ぐ時は、三人の櫂が同じ速さに揃うよう漕

がなければならぬ。そうすれば、引く力が同じになり、馬が疾駆するように流れて来る水流を、ぐんぐんと遇って行ける。櫂の先端を水に差し込んだだけで櫂を上げ下げするような漕ぎ方では、まったく歯が立たない。すぐ下流に押し流されてしまう。水流はそれほど激しい。

舟の片側では水流が凄まじい勢いで盲滅法に舳先にぶつかっている。反対側では、直径四〇メートル近くもある大渦がグルグル渦巻いている。こんな時、渦の側に櫂を差して、水流を一気に漕ぎ切ろうとしても、舟はすぐには進めない。動かないで一箇所に一〇分間ほど、じっとしていなければならぬ。こんな時、疲れが込んで、腕が麻痺して力が入らなかつたりして、漕ぐ力が少しでも弱まったりすると、舟は三〇〇メートルも下流に押し流されて、あつという間に大渦に巻き込まれ、引っ掻き廻されてしまう。

そんなことになれば、舟はニョッキリと立ちはだかるように頭を擡^{たか}げて廻り、振り落された人間は、糸車に乗ったように渦巻きの表面でクルクルと廻されたかと思うと、突然、深い井戸へ落ちるように渦に引き込まれ、河底までグルグル巻かれながら沈んでゆき、足が河底の土砂に触れたり、離れたり、独^{ひと}楽のように振り廻される。こうして時間が経ち、次第に渦が消え、水を吐き出すと、舟は川下へ四

〇〇メートルも六〇〇メートルも押し流され、急いで追つて来た他の舟に引き揚げられる。かすかに息の根が残っている人間も、渦の下流で待っている舟に助けあげられる。

サルウィンで働く男たちの掟は、他の舟が転覆したり、渦に巻き込まれたりしたのを見たり、聞いたりしたら、直ちに自分たちの舟を河の真ん中に出し、渦の中から吐き出されて来る人間を助け上げる用意をして待っていないなければならない。サルウィン河では転覆したことのない舟、壊れたことのない筏などはない。舟に乗る男たちは、この世界の掟を厳しく守っている。自分が他の者を助けなければ、他の者は自分を助けてくれようはずがない。サルウィン河の男たちは誰もが、きつとある日、出くわすかもしれない災難のことをいつも心に留め、互いに^{いたわ}りあっているのである。

カマファウンの先、ハキロほどのところの、難所の渦と、^いの渦の間の、マイ、エ、イ岩の傍の水流を舟で廻り切ろうとしていた時、そんな危険な目にわしらも出くわした。わしらが行くこうとしているメーセイまでの行程の中では、シュエゴオンからカマファウンの間だけが、最も危険が少ない。カマファウンを過ぎると、正真正銘の男の仕事が始まる。

この時季のサルウィンは、普段の三、四倍も広い。水は

濁り、渦はコーヒー・カップの受け皿ほどの小さな渦から、一エーカー(9)ほどの大きな渦まで、さまざまに大きく、河面一面に撒き散らしたように現われる。一面の泥水の中、引き込む渦、吐き出す渦、危険のない箇所などはない。井戸ほどの大きな漏斗のような渦が、五メートル離れ一つ、七メートル離れた一つと、河面一面にある。河の真ん中にニョッキリ出た岩や立ちはだかった岩が、そこそこにある。バシッ、バシッ、と岩に打ちつける水音、ブエブエと鳴る泥の音、渦の音、まるで河全体が無間地獄(10)だ。「綱場でひと稼ぎしてくるぞ。おい」と言って廻り、カマファウンを過ぎ、サルウィンの無間地獄の発する恐ろしい音に驚愕し、逃げ帰った男たちも少なくない。だから、度胸のすわった男でなければサルウィンを通ることはできない。綱場は男の行くところ、男の世界、男の稼ぎ場といわれている。

夏、三、四月頃(11)のサルウィンはのどかだ。あくまでも澄み、上品に、静かに流れる河水、鮮やかな緑に包まれた兩岸の繁み、そそり立つ河中の岩々、まさに一服の清涼剤である。左右兩岸、遠くに霞む山並は、見る者の心をいっそう晴れやかにしてくれる。

だが、六、七月の頃(12)、サルウィンは、あの穏やかな景色などまるで嘘のように変貌する。河水は濁って泥水と

化し、水流は疾駆する荒馬のように激しい。増水した水は兩岸を呑み込み、河幅を押し拡げる。美しい岩々も下の方は水面下に呑み込まれ、流れ落ちてくる激流に、突かれ、叩かれ、ゴウゴウと恐ろしい大音響を轟かせる。増水してくるにつれ、上品だった河面一面は、大小の渦が痘痕、傷痕、痣、腫れ物を描き出し、醜く変貌する。遠くに霞んだ山並は、もはや見えない。危険がいっぱいの河になる。ちょっと油断をすると、たちどころに生命を落してしまいうような河に変身してしまう。だから、わしの村では、正真正銘、度胸のある男でなければサルウインを遡るな、と言われている。サルウインは、それほど粗暴な河になってしま

う。カママフンから舟を漕いで遡り、ユオンサリン河(13)河口を越え、通称大きな林の岬と呼ばれる岬の突端にやって来た。大きな林の岬の丘と呼ばれるこの岬の突端は、歴史と伝説と謎に包まれている。大きな林の岬の奥には、樹や竹が生い茂り、藪、蔓草などで覆われた昔の都の廃墟があるといわれている。堀や町の城壁や仏塔が、崩れたまま残っているといわれている。林の奥深く、幽霊や妖怪がうようよしている大きな廃墟だと、土地の者たちがいい伝えている。サルウイン河の水流が浸蝕し、「大きな林の岬が崩れ出したと聞いたら、たとえ母が死にかかっている置

き去りにし、できる限り早く行ってみるのだ」と、昔から土地の者たちはいい伝えてきている。岬が崩れ落ちるとたちまち、世にも珍しい金、銀、宝石の類いがごっそりと出てくるだろう、といい伝えられている。

わしらは、岬の突端を廻って流れて来る象の牙のような水流を、冷や汗をかきながらやっと遡り切った、と思う間もなく、難所の渦と篩の渦の間のマイエイ岩と呼ばれている岩山の傍をうんざりしながら遡った。腕が抜けるかと思うほど漕いでマイエイ岩を迂回すると、仏の岬の激しい水流を越えなければならぬ。仏の岬を越えようと、タンパン岩と呼ばれる岩が近づいてくる。立ち漕ぎ舟のタンパン(14)の形をして、水流の真ん中にある岩である。タンパン岩にヘーヘーと打ちつけている水音は、一キロ半も離れたところでも聞こえる。この岩を迂回して遡るとカモレー村のカモレー丸太引揚げ場に着く、カモレーからさらにいくつかの渦を迂回して遡ると、二つの池の渦と呼ばれる大渦がある。サルウイン河の真ん中に大きな池が二つ浮かび、河の水が一エーカーほどの広さで陥没したように、絶えず吸い込まれて廻っている二つの大渦である。筏がこの大渦のどちらかに巻き込まれてしまうと、一日中、この二つの渦の境界から脱け出せないで振り廻されてしまう。誤って入り込んだ筏を、まず川上の渦が引き込み、三時間ほどグ

ルグル巻きにし、勢いが衰えたと見るや、引き込んだ筏をパツと吐き出す。吐き出された筏を河下の渦が引き込み、また掻き廻す。そこでも三時間ほどグルグル巻きにされ、勢いがなくなると下流に吐き出される。だから、この大渦に突然嵌まってしまった丸太一〇〇本ほど組んだ筏などは、一日中グルグル廻され、ひどい目に遭ってしまふ。この二つの池の渦の手前、サルウィン河の東岸に小さな丸太引揚げ場がある。

この引揚げ場は、サルウィン河を苦勞してずっと上流まで廻らずに、楽をしてこの辺りで丸太を引き揚げようという魂胆の丸太拾い人たちの溜り場である。水流も地勢も貯木場に適しているで、ここにはいつも大きな宿、筏が幾艘か繫留され、二、三〇〇人の丸太拾い人が集まっている。

二つの池の渦を迂回して通り過ぎると、河の真ん中に蛇岩と呼ばれる大きな岩山がある。さらに遡って行くと、河の真ん中に蒸籠岩と呼ばれる岩が蹲っている。それから、犬岩と呼ばれ、遠くから見ると、大きな犬が坐っている姿に似ている岩に出くわす。

この蛇岩、蒸籠岩、犬岩は、筏乗りには危険極まりない、厄介な岩である。筏乗りたちは丸太を四、五〇本拾うと、一本ずつ縛って一艘の筏に組み、日が暮れると、ミイボン運木場まで流送する。丸太一〇〇本ほど組んで流送

することもある。筏を流送する時は、無闇に河を下るのではない。水流を見て、今日のように雨が降っていれば、増水した水が蛇岩を越えているか、蒸籠岩が水の下に沈んでいるか、を予測しなければならぬ。岩が水面下に沈んでいれば沈んでいるように、水面上に現われていれば現われているように、筏を操って下って行くのである。沈んでいれば、岩の上を越えて行く。はっきりと現われていれば、筏を河岸沿いに寄せて下って行く。中途半端に沈んだり、はっきりと水面上に現われていない時には、河の上流から下って来る水流は、沈みかかっている岩の方に激しく引き込まれる。そんなことを知らないで下って来ると、筏は確實に岩にぶつかって壊されてしまふ。全部壊されないまでも、筏の片側の丸太一四、五本がバラバラにはずされてしまふ。だから、筏乗りの男たちは、これらの岩に特に注意しなければならぬ。目測をひとつ間違えば、とんでもないことになる。それに、これらの岩は、ひとつだけニョッキリと水の中から突き出ているような岩ではない。鋸の歯のように、野獣が歯を剥き、牙を剥いたように、波立っている河面に切り立ち、聳えている岩山である。

犬岩を過ぎると、渦の行列と呼ばれる泥水の渦の行列を越さなければならぬ。泥水の渦は、引き込む渦ではない。噴き出している渦である。炊飯釜がフーフーと蒸気を

噴き出すように、泥水の噴水をパッパッと吐いている。あるいは、並んで屈んでいた人間たちがいっせいに我れ先に立ち上がるように、河面一面に騒々しく泥水を噴き上げてゐる。この泥水の渦の行列を避けて通り過ぎると、コ、ヤシ、の並木と呼ばれる引き込み渦のところにやって来る。この渦も河面一面にある。直径五メートルもある渦が、ひとつずつ、九メートル、一〇メートルの間隔で河一面に渦巻いている。コ、ヤシの並木を越すと、イン、バ、イン渦があり、間もなく、インバイン村^⑬が見え始める。河の真ん中のインバイン渦をやつとの思いで通り越すと、インバイン村に到着する。

インバイン村からさらに遡って行くと、風車の谷と呼ばれる渦がある。風車の谷を越えと、岩柱と呼ばれる名高い岩場にやって来る。この岩柱の手前、河の東岸に小さな丸太引揚げ場がある。この引揚げ場は、河上から下って来た筏が岩柱の岩にぶつかって砕け、一本ずつ丸太になって流されて来るのを待ち構えていて引き揚げる、丸太拾い人たちの溜り場である。

岩柱岩場を過ぎると、お化け渦というのがある。この渦のことは特に言う必要はないだろう。名前が語っているから。お化け渦を過ぎると、サルウイン河の東岸のメーセイ丸太引揚げ場に到着する。インバインからメーセイまで一

一キロほどはあるだろう。

わしらの舟がメーセイ丸太引揚げ場に着くと、日暮れてしまった。シュエゴオンからメーセイまで距離^⑭にしてどのぐらいあるかは知らないが、一日中、腕が抜けるかと思うほど懸命に舟を漕いできた。メーセイに着くと、わしらは舟を宿筏に繋留し、宿筏に泊ることにした。

宿筏とは河岸に繋いだ筏の上に小屋を建てたものを用う。筏乗りや丸太拾い人たちは、引き揚げたチークの丸太で筏を組み、その上に雨、風を通さない頑丈な屋根と壁の大きな小屋を建てる。筏の上に建てた家みたいなものである。それを宿筏と呼んでいる。

一艘の舟で丸太拾いにサルウイン河を遡って来た男たちは、メーセイに着くと、とりあえず宿筏に泊る。宿賃は払わなくともよい。宿筏の主人に飯を喰わせてやればよいのである。食糧を舟に積んで来ないときは、逆に宿筏の主人に飯代を前借りして喰わせてもらう。食糧舟が着いたら返せばよい。こんなことはサルウイン河で働く男たちの習慣みたいなものである。

メーセイに着いても小屋を建てることのできない丸太拾い人たちが、一〇日宿筏に泊れば、宿筏の主人は一〇日分ただで飯を喰えることになる。宿筏では男たちはよく、賭けトランプをやる。メーセイに着いた夜、わしらはそんな

宿筏のひとつに泊ることになった。

綱場つなば（チョーダン）

イギリスが下ビルマを併合した後⁽¹⁷⁾、ボンバー・バーマ会社⁽¹⁸⁾はモールメイン⁽¹⁹⁾に木材事業部を開設し、タイ国のチーク材産業をも取り仕切った。

当時、すでにタイ国には、ボンバー・バーマ会社が支店を開設していた。このタイの支店がタイ王国政府と長期契約を結び、チェンマイ地方⁽²⁰⁾のフウィンロンデー森林、メーホーンソーン森林、タイ・ビルマ国境を流れるタァウンイン川⁽²¹⁾一帯の森林、ヤハイン地方メーサウツ地区の森林を租借し、伐採したチーク材をタァウンイン川とサルウィン河を利用して流送していた。

枝を落し、伐り倒された木材は、象、水牛、牛車などに曳かれ、タァウンイン川やサルウィン河の河岸に下ろされる。タイ領内のフウィンロンデー森林などの木材は、直接サルウィン河の岸へ、タァウンイン川一帯のタイ領内の森林の木材はタァウンイン川の岸へ搬出される。雨季になり、河が増水すると、河岸に置かれた木材は再び象に曳かれ、河に流されるのである。増水した水で自然に流れ出す

木材もある。

ビルマ領内の木材をタイの樵や木材商人たちが盗伐することもある。タイ領内の木材をビルマ側から盗伐している者たちもいる。チーク材の価値が一般に認められてくると、外国人の無断持出しが盛んになり、盗伐が横行してきた。こんなことは何年も前からあったことである。両国政府の許可なしに盗み出しているのである。

盗伐に関してタイの当局は、ビルマ語で次のような告示文を出したことがある。

手書きのこの告示文は、年代は入っていないが、ウー・シュエフレがマウンシャンに出した請負委任状と似ているので、一八九八年に出されたものであらう。

告示

一般の者に周知させるために告示する。

ミンタビエー川が流れ込み、メエテエ川へと接続しているサルウィン河本流の東岸、タイ領内のメエテエ森林、コッコー森林においていかなる樹木であらうとも許可なしに伐採することを禁ずる。メーホーンソーン市(2)

森林長官の許可なしに伐採したのを発見した場合はただちに伐採した木材、伐り出しに使用した象を没収する。盗伐した者はチェンマイ市の権威ある裁判所の下す判決に服さなければならぬ。

メーホーンソーン市

森林長官

告示内容のあらましは、タイ領内のメーホーンソーン森林、メエテエ森林、コッコー森林のチーク材を盗伐し、メエテエ川、ミンタビエー川からサルウィン河本流に流し込む者がいるので、メーホーンソーン市の森林長官の許可なしの伐採を禁じ、盗伐を見つければ、木材と象を没収し、さらに、チェンマイ市の裁判所が下す罰金刑に処する、と述べているのである。

タアウンイン川に落される木材は、タアウンイン川を流れ下って、椰子林の入口と呼ばれるところでサルウィン河に入る。このようにタイ領から伐り出された木材は、サルウィン河を動脈にモールメインに流送されていたのである。モールメインに到着する前に、カドー村(2)のような水流の穏やかな場所でボンペー・パーマー会社の雇用した